

演題8 石灰化歯原性嚢胞の1症例

○沼田 与志晴, 佐々木 正道, 佐藤 憲太郎
越前 和俊, 関 重道, 関山 三郎
鈴木 鍾美*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

今回、われわれは臨床上 complex odontoma と思われた所見を示し、病理組織学的検索の結果、高度の石灰化を示しかつ odontoma を伴った石灰化歯原性嚢胞と診断された症例を経験したのでその概要を報告した。

症例39歳の女性で、32|根尖相当部歯槽粘膜の腫脹を主訴として来院した。口腔内所見は、32|根尖相当部歯槽粘膜に10×15mm小指頭大で限局性の腫脹がみられ、表面は平滑で、色調は周囲粘膜と同じく、硬度は骨様硬で一部羊皮紙様感があり、圧痛はなかった。2|は遠心傾斜し、3|は近心傾斜していた。X線所見は、32|歯根部に境界明瞭な類円形で小指頭大の透過像がみられ、その中に多数の不整形斑状の不透過像がみられた。処置は局麻下で切開を加え唇側より腫瘤を一塊として摘出し縫合閉鎖創とした。摘出物は10×15×10mm大で軟組織に被包され一部歯牙様硬組織が突出していた。触診で充実性に硬組織の存在が感ぜられた。経過は術後4ヶ月の現在良好である。

病理組織学所見では線維性嚢胞壁の内面はエナメル器に類似した構造を有する上皮によって被覆され、こ

の上皮には ghost cell 及び石灰化物が多数存在していた。ghost cell は角質変性した上皮細胞で石灰化と関係があり、displastic dentin や dentin, enamel, 形態構造不明な硬組織が散在していた。以上の所見より、高度の石灰化を示しかつ歯牙腫を合併した石灰化歯原性嚢胞と診断された。

Gorlin らが1962年、初めての石灰化歯原性嚢胞と分類命名して以来、この疾患はわれわれの渉猟した範囲内ではわが国では30数例しかみられないきわめて稀な疾患であるが、本疾患は歯根吸収、骨破壊、再発などの報告もあり腫瘍の性格を有することもあり処置に際しては完全な摘出が必要と思われる。

質 問：上野 和之（第2保存科）

1. 腫瘍とする考え方はないでしょうか。
2. Ghost cell の意義について教えてください。

回 答：鈴木 鍾美（口腔病理）

本疾患は1962年 Gorlin が、石灰物と ghost cell の存在を特徴とする歯原性嚢胞に対して特別に calcifying odontogenic cyst と名づけ、他の疾患と分離させたことと始まる。

また、本症は keratinizing and calcifying odontogenic cyst という名称も使用され、現在なお、利用されている。(ghost cell は角質化した細胞と考えられている。

この疾患は、時には他の組織型の歯原性腫瘍などへの推移を示す場合がある。このような場合も ghost cell の存在などが、その判定に重要な役割をもっている。

このようなことから ghost cell は、本症の診断基準の重要な factor と考えている。